



部落問題文芸作品選集

第25卷

錦城亭貞玉演 鳥追お玉（上）

世界文庫版

部落問題文芸作品選集 第二五卷

昭和五十年七月十五日発行

発行者 松 本 富 夫

発行所

株式会社 世界文庫

東京都目黒区洗足二―二二―一五
(七一六) 六一五一 (代表)
電話〇三 (七一三) 九二四四 (夜間)
振替 東京 七八四九八番 千一五二

落丁、乱丁本はお取替えいたします。

序

近來小説の世に行はるゝや時勢の進歩と共に倍其
 趣向尤も斬新を極める年に月一日の進歩と傑作絶妙愈
 出て愈秀巧なり然れ共講釋師が昔時より軍談騷動
 俠客情話探偵談の如き積年之を專業とし講談場
 裡に數年幾百回となく机上に張扇子を叩き喋々喃
 々と演ずる其口調に喜怒愛樂の情を寫して一聞其
 實神に接するの感あらむ是年來の熟練とはいへ
 ぞも其筋の洞徹し婉曲あり抑揚ある雅味淡泊な
 獨特の口調を速記術なる言語の寫眞を以て記せ
 し冊子は近來の普通小説に優るも劣る事なし去れ

は小説の出版數多しといへども都下有講談師が十
 八番とする物を選び之に加るに老練の速記者をし
 て記せる講談小説には遠く及ぶ處にあらす故に此
 近來無比なる好冊子一本を購ひたまはゞ講談場に
 趣向いて講談を聞くと寸毫も違はずして其人に接
 せざるも目前に在如く其場に入らざるも其人に會
 するが如き心意あれば一讀再讀益々妙と呼び快と
 號ぶ事疑ひなけれは看客其僞りならざるを曉り御
 購求あらん事を主人に代つて冀ふになん

吞
 鯨
 主
 人

詩仇鳥

追

お

玉

第一回

錦城齊貞玉講演
速記社社員速記

朝日に輝く國旗は春風に翻るとして勇ましく、市民は晴着を飾りて恵方詣り、學校生徒は教員の前に年賀を祝し、鉢の梅は笑を含み、福壽草は本位金貨の色をなし、軒端に雀の囀り聲、吻青き貞玉が今日から読出す鳥追お玉の貞婦傳、本年も相變らずで愛讀を御慶と共に願上げます、抑鳥追お玉のお話ば是れまで同業者が申上げさせぬ講談でございます、尤も鳥追お松といふのは先づ年假名垣魯文翁が綴りなしたものは講談師が取次いで演じてをりますがお松は毒婦此のお玉は貞婦後に天明の七年淺草雷門外にて養父の仇を討ちました適れな話でございます、東京が未だ江戸の昔は女太夫といふものがありました之れを小屋者と申

しまして通常の人の交際を致しませぬ重に淺草堂前唯今は松蔭町と申し
ます或は新堀端等の裏家に住んでをりました尤も鳥追といふのはドウい
ふ訳で申したものでせうか春の初に勇ましく小歌にもありませう梅にも
春の色添へて若水汲むや車井戸音も忙しき鳥追の」と申します、又

鳥追の聲にも乗るや春心

といふ古い發句がございます、鳥追の歌といふものは「せじよやまんじよの
鳥追が」と唄出ましてチャンチャラ〜大層陽氣な三味線、自然と春心にな
ります又京阪地でも矢張り鳥追も参りますし、それにチヨロといふものが
ございますチヨロといふのは異形の張子を被りまして箒のやうなものを
摺つて参りますす是れは東京では餘り見させぬ正月の祝は所々で變つてを
りまする唯變りませぬのは松飾ばかりでございます

茲に三番町に奥田内記様と申上げます火事場見廻りのお役をお勤めに
相成りまして御高二千五百石の内福のお旗下がございしました時一陽来
復の春を迎へた門飾お玄關にはご家來方二三人詰めてをりまする徳川様

と時代には總て火消役等になりますと禮服は火事羽織であつたさうで消
 防のことに就きましてはそれ〴〵御掛がありまして先づお大名にてはお
 火消役は大手方、櫻田方、二ノ丸、紅葉山、吹上、淺草お藏、本所御米藏、三
 寺、東叡山、寛永寺、聖堂、猿江お材木藏などと申して何れも皆お大名方が此
 お火消の掛をなさる又方角火消といふのがございます是れもお大名方が
 お勤めになります、そこで定火消役といふのは旗下でございます、それに續
 いて火事場見廻といふお役がございまして大抵五千石位から二千石位の
 所のお高のお方がお勤めになりますのでございます中々の利役でございまし
 た、
 當日は奥田様も朝早くお登城に相成りましてモウ四時時分にはお歸りそ
 れより皆ご家来達は正月元日のことでございまして別にご用もなく殊に
 其の日は誠に穩にして出火沙汰もないと皆一同に安心を致してをりまし
 た、
 夕景になりますと今日はお目出たくて酒宴此の時ご用人は井上久馬、相役

水谷善兵衛の兩人其の他で家來が悉皆で十三人、尤も二千石位の御高です。とで家來が三四人しかないお旗下もございます此の奥田様は内福でございますゆゑ自然とお屋敷も陽氣でございます此の用人とお側へ出られるお役人三四人お奥へ召されて内今日は目出たい、皆一同充分に飲め、一同有難うございます、お目出たう存じます」

奥方はおも様と申上げました、然るにお妾が一人ありましてお花と申しました以前此の者は深川に藝妓を致してをりましたが二年ほど前に此のお屋敷へお妾に上りました大層さ前の御意に入りそれに奥方の御意にも適つてをりました、

兎角にお妾からしてお家の騒ぎの出来るといふのは世間に行々あることでございます、此の用人の井上久馬の恰に清といふのがございまして當年二十二歳至つて美男でありました何時しかお妾のお花が此の清に心を寄せてをりました折々お花の方から清へ艶書などを送る清は兎に角殿様ので愛妾であるによつて身を慎み程宜く之れを斷つてゐる、それに大名

方と違ひまして、小身のお旗下です。から用人の俸になります。とお奥へ構はず出入りが出来。ます自然とそれが爲めに男女の中に隈褻などが有勝ちでござます。

今日も今日とてお側にめされ、恒宴の最中殿様が「花、ソレ三味線を弾けく、花ハイ畏りました、それには又お女中のお里お絹お芳老女といふのは袖野と申しまして是れはモウ六十八九歳、是れよりお花は三味線を執りまして「春の初の春駒なんどは夢に見るさへ宜いとや申す」などといふやうな歌からして唄始めました。尤も以前が藝妓なり聲は美し三味線は遠者殿様はご機嫌宜くさういふ陽氣なことの好きなお方ですから皆お女中が三味線も弾けば鼓太鼓總て音曲に心を入れてをりまして陽氣にドン／＼騒ぐ又殿様は大層酒家であらせられまして幾ら飲んでも酔倒れるといふことはなく奥方も自然と夫に連れて所謂亭主の好きな赤烏帽子で陽氣なことがお好です。から夜の深けるまで酒宴、

井上久馬といふ用人は此奴渡り三いでございまして是れは年に三兩の給

金に月に一人扶持を買ひますからそれで之れを三一つと洒落に申したものださうでございます中々藝のある老爺ですから新規お召抱の者ではあるが大層殿様の氣に入りまして今日も久馬相變らず上方謠を一つ唄へ久「畏りました」と頭を禿らかして久馬が「春は花イザ見にござんせ東山なぞ唄出す後が踊りお女中も面白い老爺さんだと井上さん」といつて皆持嫌されました父がそれですから仲の清も遊藝を好むものと見えまして聴て笛を取り出した此の時お妾のお花が三味線を弾き今一人お女中のお里といふ者が胡弓を執る誠に以て心地宜く今日のお遊び然るに水谷善兵衛といふ人は唯一人歎息してをりますのは自己は此の家の譜代でございます所が唯篤實一遍世才に疎い人で、漸々三年前にお召抱になつて中小姓から段々立身をした井上久馬仲の清と共に何のことはない是れは之前に於ては幫間にお召抱になつたものと善兵衛はそれの心配いたして酒宴の最中に侍達の踊りなぞを見ては俯きまして溜息のみを吐いてゐる殿様は何となくそれが分りましたから善兵衛其の方はどうし

た何か唄へ〜斯う皆一同賑つてゐる中で其の方一人何で不興の體だ
 驚恐入りました私は中々不興などをいふことはございませぬ今日は皆一
 同の芸^{げい}尽^づし面白く善兵衛も此處に眺めてをります先刻より少々腹痛が致
 します内「あゝさうかそれぢやアモウ下れ〜其の方みたやうな陰氣な
 者は行かぬ〜今日は正月の元日目出たい日に陰氣な老爺は嫌ひだ下れ
 〜と仰せられる、そこで水谷善兵衛も殿様のお言葉返しては恐れ入る
 から、それではご免を蒙りまして暫時休息を致します」とお次席へ下つて仕
 舞ふ、

お座敷は益々酒が盛になつて來て終ひには殿様も扇を執つて「予も何か
 一つ舞はん」と仰つしやる其の中に清もお相手をしてをりましたが少し酒
 に酔ふたと見えてお次席へ下り數多のお女中は殿様のお側に頻りと唄
 ひまする舞ひまする、

此の時清はお鈴の口を離れまして竹の間といふ所へ來て暫時酔を醒さん
 と唯一人横になつてをりました所へパタリパタリ人の足音ハツと心得て

起上ると「清様」といふ聲に「ハイ貴女はお花様 花」ッ……」何を言ふたか此のお妾のお花が清の側へ寄りまして二言三言呟いてゐる折しも向ふのお襖がガラリと開いた物音に驚く兩人は右左お花はお奥へ駆けて往き、清はお椽側の所まで來て「ア、酔ふた」と厠へ遣入る振りをして其の場を胡麻化しました、襖開けて出來つた其の人は是れぞ誰でありませうか次回に演じるといたしませう

第二回

三ヶ日の祝日も早や過ぎまして四日の日殿様は相變らずお登城此の日は水谷善兵衛の當番でありましてお八時になりますと何れも以前はお八時菓子といつてお奥にてお女中方へお菓子を賜ふす此の時奥方おもと様が里や今日用部屋の當番は誰であるか里左様でございます水谷さんでございますもよ「ハアさうかチヨツと善兵衛を呼んで來てお奥れ」お女中は

お鈴の口へ参りまして之れを鳴らす當番が其處へ取次に出ます。里、あの
善兵衛様與方様のお召しでございます。善、ハア左様か。用部屋に詰めてを
りました水谷、與方のお召しと聞いて何ごとであらうと急いでお與へ参り
ます。

丁度お八時、菓子も濟みまして與方はお居間に唯一人、善兵衛、参つたか。善、
ハイ。もよ、今日は少しお前に妾が話がある。善、畏りました。尤も此の時は
お人拂ひで與方と善兵衛との差向ひ。善、與様何のご沙汰でござひます。
もよ、他ではないが、ご前様が此の節は餓り、酒が過ぎて毎日、酒宴のみを
れに遊藝をお楽しみ遊ばし、あらうことか。武家たるものが三味線を執つてお
稽古をなさるな。誠に妾も心元ない、お前は與田の家の譜代、何とか殿様へ
ご諫言を申し上げては呉れまいか。善、是れは恐入りました。お言葉、實は此の
善兵衛も此の間中よりそれを心得てをります、と申すは彼のお花殿、惡いこ
とはございませぬが、以前申しき藝妓を致してをりまして遊藝を以て世を
送りました者が、ご愛妾になりました爲め殿様も自然と彼のやうなことを

お覺え遊ばして此の善兵衛に於ても實に心配いたしてをりました抑て當
 家ので先祖は權現様に仕へて勤功もあり旁々以て斯くまでのお取立
 て君は一代お家は未代それを私は心配してをります併し唯今では與様も
 と承知あらせられます通り彼の井上久馬がお屋敷を一抔に致し役に立た
 ぬ此の善兵衛自然とあつてなきが如く私より與様へこの沙汰は家來の身として恐入
 り奉りました寧ろそのことは是れはお花殿をお暇の方がお宜しいと心得ます
 もよ、オ、それぢや妾もそれを心得てゐるけれども愔氣は女子のたしなむ
 所今花のことを申すと自然と此の身が愔氣嫉妬から言ふやうに當る昔か
 ら諸家の騒動は妾より起るお花は妾にも能く仕へて呉れ決して了簡は悪
 い者ではないが矢張り下賤に育つた者ゆゑ下方のこのみで前へ申上げ
 て見るもの聞くものお珍らしいに依つて皆下方のことをお覺え遊ばす之
 れを妾が申すと今言ふ通りに愔氣に當る何でとか善兵衛工夫を以て相
 手當をして花を下げることは出来まいか「善如何にも御意にございま

すそれに容易ならぬことが茲にございます もよ「ナ」容易ならぬとは何
 ごとであるか 善「イヤ」是れは却つて申上げない方が宜しうございませう
 もよ「イヤ」 善兵衛決して妾に於ては假令容易ならぬことがあらうとも
 口外はせぬに依つて言ふて呉れ何か花に過失でもあるか「善」ありまする
 もよ「ナ」其のあると申すは 善「ハイ」久馬の悴清と……… もよ「エツ」ナニ清
 とか 善「元」日の其の夜も此の善兵衛一旦お祝のお席を下り再び機嫌伺
 ひに奥へ出やうと存じてお鈴の口まで参ると廣席の開所に何やら町く男
 子と女子何者ならんと襖を開ける途端に兩人は驚き左右へ別れましたが
 紛ふ方なき清とお花………」と申上げたる半ばを聞いて奥方おもよ様「ン」さ
 うか實は妾も其のことぢや他のことならば何なりと話も出来るが其の話
 のことを言出すと嫉氣の上に嫉氣といはれるゆゑ是れまでたしなんでゐ
 たが去年の暮のお煤取彼の晩お表の若衆を召されての酒宴其の時も彼
 の三の間で花と清が何やらヒツ／＼内證話御廊下で妾も聞いた憎い奴だ
 彼の花は」と口には言はねど心の中自然と面に表れる貞操の奥方のお心を

察した忠義の水谷善兵衛「宜しうございます是れは何ぼご前様でも火事場
見廻りといふお大役もお勤めに相成る位殊に當時お上向の羽振り宜く其
の中段々ど立身お側にもなれるお身の上密夫の爲めにお心得違ひがあ
つては宜しうございませぬ君へ諫言は此の善兵衛恐入り奉りますすが時と
しては強諫なし君を弑しても奥田の家は萬々歳の末までも榮えまする
を宜しと致す命を捨てゝも此の善兵衛が此の義は必ずご諫言を申上げま
す決してご心配遊ばされますな もよ「それでは善兵衛何分其の方に此儀
を頼んだぞよ」

さう斯うする中にお刻限お玄關にて「お歸り」ハッど驚く善兵衛奥方のお
前にお辭義は勿々お玄關へお出迎ひ奥田内記様御馬にてお歸り直ぐにお
興へならせられる奥方はお鈴の口までお出迎ひ、

内「サア」今日は殿中にて少し心面白くないことがあつた酒の支度いた
せ……花三味線を弾け……里唄へ……絹踊れ「お歸り早々お着換もな
く直ぐにご酒宴のお支度になりました善兵衛は又始つたと思へども何か